

第 55 席：耳聾について 日本鍼灸研究会 吉岡広記

1. 緒言

『耳聾』は、『説文』耳部に「聾、無聞也」とあるように、耳が聞こえない様を言う。医書では、『靈枢』刺節真邪に「夫癢者、耳無所聞、目無所見」とあるように、「聾」*1 あるいは「耳無所聞」などとも記される*2。古くは馬王堆出土の『足臂十一脈灸経』(以下『足臂』と略す)では足太陽脈および手足少陽脈の病として、また同所出土の『陰陽十一脈灸経』(以下『陰陽』と略す)並びに張家山出土の『脈書』では足太陽脈(鉅陽脈、『靈枢』経脈は手太陽脈)と手少陽脈(耳脈)の所生病として、それぞれ考えられていた。すでに戦国末頃には一定しない「聾」の認識は、後漢代にはさらに様々な見解が打ち出され、複雑な様相を呈す。『素問』、『靈枢』、『明堂』(『甲乙経』)の記述から変遷を追った。

2. 『素問』『靈枢』(運氣七篇は除外)

『素問』では生氣通天論(素 1 5.用例一覧に対応)、五藏生成(素 2)、診要経終論(素 3)、蔵気法時論(素 4、素 5)、通評虚実論(素 6)、熱論(素 7、素 8)、刺熱(素 9)、厥論(素 10、素 11)、脈解(素 12)、刺禁論(素 13)、繆刺論(素 14、素 15)の 11 篇 15 条、『靈枢』では終始(靈 1)、経脈(靈 2、靈 3、靈 4)、寒熱病(靈 5)、熱病(靈 6、靈 7)、厥病(靈 8)、雑病(靈 9)、決気(靈 10)、刺節真邪(靈 11)の 8 篇 11 条、計 19 篇 26 条に「耳聾」の用例がある。

以下、病の深さ、病因、治療部位の三点から分析した。

A. 病の深さ

『素問』、『靈枢』では、病に深さ(所在)という観点が加わり、経脈だけでなく五藏の病としても設定される。

経脈(表 1):全 26 条のうち 22 条に経脈の記載がある。その内訳は、足少陰 2 条、足厥陰 2 条、足陽明 1 条、足太陽 1 条、足少陽 8 条、手太陰 1 条、手陽明 3 条、手太陽 2 条、手少陽 2 条である。出土医書の 3 脈(足太陽、手足少陽)から 9 脈へと増える。陰脈は足少陰と足厥陰、手太陰のみで、陽脈は手足すべてが出揃う。手足では足が多く(足 14 条、手 8 条)、足少陽脈が最多である。

なお、手足すべての陽脈が挙げられたのは、『靈枢』経脈において別絡を含めて耳およびその周辺を流注すると設定されたことに起因すると見てよいだろう。このほか、足少陰は耳を主る腎との関わりにより、また足厥陰は「過在足少陽厥陰(素 2)」「肝病者...取其経厥陰与少陽(素 4)」という記述から足少陽との表裏関係により、それぞれ出てきたものと考えられる*3。手太陰は、以下の五藏で述べるように、肺病として考えられたことに拠るが、その理由は不明である。

五藏:全 26 条のうち 7 条に五藏に関する記載がある。その内訳は肝(素 2、素 4)、肺(素 5)、腎(素 9・靈 6:骨、靈 7:髓、靈 10:精)の 3 藏であるが、その中には経脈から五藏へと病が進行する場合も含まれる(素 2「過在足少陽厥陰、甚則入肝」)。なお、後に隋末の『諸病源候論』*4 で腎の病として認識されるための規定が初出するが、ここではいまだ主要な認識ではない。肝は、すでに述べたように足厥陰と足少陽との表裏関係により出てきたものと考えられるが、肺についての明確な論理は見えてこない。

表 1. 経脈分布と流注一覧

	太陰	少陰	厥陰	陽明	太陽	少陽
足		素 9、靈 6	素 2、素 4	靈 9	素 12 / 足、陰脈	素 2、素 3、素 4、素 7、素 8、素 10、靈 1、靈 9 / 足
流注				上耳前	支者...至耳上角 / 之耳、入耳中	其支者從耳後入耳中 / 其直者...出於耳
手	素 5			素 14(絡)、素 15、靈 4(別)	素 11、靈 2	靈 3、靈 5 / 足、陰脈
流注				手陽明之別...入耳	支者...却入耳中 / 陰脈起於耳後	其支者從耳後入耳中 / 奏耳、出耳前

*表中の素靈は、5. 用例一覧に対応する。足は『足臂』、陰は『陰陽』、脈は『脈書』を示し、網掛にて素靈と区別した。流注は、『靈枢』経脈および足陰脈の記述を抜粋したものである。なお足陰脈の記述は網掛にて素靈と区別した。

B. 病因

全 26 条のうち 11 条とすべてに示されるわけではないが、傷寒による熱病*5(素 7、素 8、素 9、靈 6、靈 7)、厥病(素 1、素 4、素 6、素 10、靈 8)、精脱(靈 10)、刺鍼の過誤(素 13)の 4 つに分けられる。

*1『太素』卷二十二・五節刺22-41-04楊注云「耳謂目不明」、『靈枢講義』刺節真邪21-24a06所引楊注作「耳目不明」。
 *2ほか『素問』生氣通天論「耳閉不可以聽」、『靈枢』寒熱病「耳目不明」、厥病「耳聾無聞」などの表現がある。5. 用例一覧を参照のこと。
 *3今、いずれを是とするかは識らないが、これに類すると思われる生氣通天論(素 1)を指摘しておく。「煎厥」を耳聾の病因とするため、新校正が指摘するように脈解13-12a04~12b02「少陰者、腎也。...不能久立久坐起、則目~~眩~~無所見。...善怒者、名曰煎厥。所謂恐如人將捕之」が参考となる。王冰は腎と膀胱およびその経脈の病として解すも、これにより腎および少陰脈との関連が示唆され、また蔵気法時論(素 4)との類文関係も見出されることから、同時に肝および厥陰脈との繋がりが考えられる。
 *4 卷二十八・耳聾候 29-03b04 ~ 11「腎為足少陰之經而蔵精、氣通於耳、耳、宗脈之所聚也(『靈枢』口問)。若精氣調和、則腎蔵強盛、耳聞五音(『靈枢』脈度)。若勞傷血氣、兼受風邪、損於腎蔵而精脱、精脱者則耳聾(『靈枢』決気)。然五藏六府、十二経脈、有絡於耳者、其陰陽経氣、有相并時、并則有蔵氣逆、名之為厥、厥氣相搏、入於耳之脈、則令聾。其腎病精脱耳聾者、其候類顔色黑(『靈枢』五閱五使)。手少陽之脈動、而氣厥逆、而耳聾者、其候耳内焯焯也。手太陽厥而聾者、其候聾而耳内氣滿(『靈枢』経脈)」。
 *5『素問』熱論 09-01a06 云「夫熱病者、皆傷寒之類也」。

これらのうち、病因と病證との関係が明解なのは次の6条である。まず、傷寒による熱病に該当する「骨痛」(素9、靈6)や「熱在髓」(靈7)といった表現が見られることから、熱を忌む腎の病という認識が根底にあったことは疑いない。「精脱」(靈10)もまた腎精を意識したものと考えてよいだろう。客主人への刺鍼の過誤(素13)は、そこを流注する足少陽脈を傷害するためである*6。

C. 治療部位

指示を示す「刺」「取」のあるのは、全26条のうち12条(重複を含む)であり、治療部位を経脈と部位とに分けられる。

経脈: 治療指示のある12条のうち7条が該当する。内訳は、足少陰(素9、靈6)、足厥陰(素2、素4)、足陽明(靈9)、足少陽(素2、素4、靈9)、手太陰(素5)である。

部位: 治療指示のある12条のうち6条が該当する。経脈のほかに、耳の周辺部(靈8:耳中、素15:耳前、素13:客主人、靈5:天牖、靈11:聴宮)と手の特定の部位(素14:手陽明之絡の病 - 手大指次指爪甲上去端如韭葉・中指爪甲上与肉交者、靈8:(手少陽) - 手小指次指爪甲上与肉交者)が挙げられる。

3. 「明堂」(孔穴主治条文のみを対象とし「素問」「靈樞」との対応箇所は除外)

『甲乙経』巻七・六經受病発傷寒熱病第一中(天牖、第一下(6条6穴。少沢。後谿。陽谷。竅陰。俠谿。束骨)、巻十一・陽厥大驚発狂癇第二(1条2穴。膈俞。偏歴)、巻十二・手太陽少陽脈動発耳病第五(14条20穴。上関。下関、陽経。関衝。液門。陽谷。耳門。聴会。聴宮。翳風。会宗。天窓。天容。肩貞。腕骨。商陽。合谷。中渚。²¹外関。²²四流)の4篇に見え、孔穴主治条文は22条、穴は凡そ29穴(陽谷の重複を含む)である。

A 病の深さや B 病因は主治条文には示されないが、篇名や前後の主治證からある程度推定できる。病の深さについては、五蔵という観点は無い。耳聾を主治する穴の大半が、「靈樞」経脈の影響を受けての篇名と思われる巻十二・手太陽少陽脈動発耳病第五に占められていることや、以下に述べる治療部位の傾向からもわかるように、五蔵と関わりの深い背部の俞穴と腹部の募穴があるにも関わらず、経脈の所属がより明確な手足の穴(それも主に要穴)が多く選ばれていることが、「足臂」以来の経脈の問題として考えていることをよく示している。

C. 治療部位

経脈や特定の部位に変わり、穴という観点が明確に加わる。部位別(表2)に分けると手15穴(手陽明4穴、手少陽6穴、手太陽5穴)、足3穴(足少陽2穴、足太陽1穴)、耳前6穴(足陽明1穴、手少陽4穴、不明1穴)、頸3穴(手少陽2穴、手太陽1穴)、肩1穴(手太陽)、背1穴(不明)と手が最も多い。なお、患部に近い耳前・頸・肩が合わせて11穴であるのに対し、経脈とより関わりの深い手足が18穴(そのうち手が15穴)と多く、経脈への意識が高い。

経脈別(表3)に分けると、足陽明1穴(耳)、足太陽1穴(足)、足少陽2穴(足)、手陽明4穴(手)、手太陽7穴(頸1穴、肩1穴、手5穴)、手少陽12穴(耳4穴、頸2穴、手6穴)、不明2穴(背、耳)と、「陰陽」や「脈書」で耳脈と称された手少陽脈が最多であり、足少陽脈が多かった「素問」「靈樞」とは傾向が異なる。また陽脈すべてが挙げられる点で「素問」「靈樞」からの一定の影響を看取できるが、陰脈を用いないところにより経脈を重視する姿勢を感じる。

表2. 部位別分布

耳前(6穴)	背(1穴)	液門	〃
下関 足陽明	膈俞	会宗	〃
上関 手少陽	手(15穴)	中渚	〃
聴会	偏歴	手陽明	²¹ 外関 〃
聴宮	陽経	〃	²² 四流 〃
翳風	商陽	〃	足(3穴)
耳門	合谷	〃	束骨 足太陽
頸(3穴)	少沢	手太陽	竅陰 足少陽
天窓 手太陽	後谿	〃	俠谿 〃
天容 手少陽	陽谷	〃	*表中の数字は5.用例一覧の『甲乙経』に対応する。
天牖	陽谷	〃	
肩(1穴)	腕骨	〃	
肩貞 手太陽	関衝	手少陽	

表3. 経脈別分布

足陽明(1穴)	手太陽(7穴)	天牖	頸
下関 耳・足少陽	天窓	頸	天容 頸
足太陽(1穴)	肩貞	肩	関衝 手・井
束骨 足・俞	少沢	手・井	液門 手・榮
足少陽(2穴)	陽谷	手・経	中渚 手・俞
竅陰 足・井	後谿	手・俞	²¹ 外関 手・絡
俠谿 足・榮	腕骨	手・原	会宗 手・郄
	陽谷	手・経	²² 四流 手
手陽明(4穴)	手少陽(12穴)	不明(2穴)	
商陽 手・井	上関 耳・足陽明	膈俞 背・足太陽?	
合谷 手・原	聴会 耳	耳門 耳前	
陽谿 手・経	聴宮 耳・足少陽・手太陽		
偏歴 手・絡	翳風 耳・足少陽		

4. まとめ

後漢代の認識は、隋唐以降に定着する腎の病としての認識も萌芽するが、主体となったのは「足臂」などにはじまる経脈の病という観念の敷衍であった。

*6 『靈樞』経脈 05-06b06 「其支者、從耳後入耳中、出走耳前、過客主人。」。

5. 用例一覽

『素問』(顧從德本)

- 素 1. 生氣通天論 01-16a08 ~ 16b02 「陽氣者、煩勞則張、精絕、辟積於夏、使人煎厥。目盲不可以視、耳閉不可以聽、潰潰乎若壞都、汨汨乎不可止。」
- 素 2. 五藏生成篇 03-11b10 「徇蒙招尤、目冥耳聾、下實上虛、過在足少陽厥陰、甚則入肝。」(甲 11)
- 素 3. 診要經終論篇 04-11b02 「少陽終者、耳聾、百節皆(終始作「盡」字)縱、目(震)絕系(終始作「目系絕」三字)、絕系(終始作「目系絕」三字)、一日半死(終始作「一日半則死矣」六字)。其死也、色先(終始無「先」字)青白、乃死矣(終始無「矣」字)。」(靈 1、甲 4)
- 素 4. 藏氣法時論 07-06a05 「肝病者、兩脇下痛引少腹、令人善怒、虛則目(咲)無所見、耳無所聞、...取其經、厥陰與少陽。氣逆、則頭痛、耳聾不聰、取血者。」(甲 10)
- 素 5. 藏氣法時論 07-07a06 ~ 07 「肺病者、...虛則少氣不能報息、耳聾(啞)乾、取其經、太陰足太陽之外厥陰內血者。」(甲 12)
- 素 6. 通評虛實論篇 08-16a06 「暴厥而聾、偏塞閉不通、內氣暴薄也。」(甲 27)
- 素 7. 熱論 09-01b10 ~ 02a01 「傷寒...三日少陽受之。少陽主胆、其脈循脇絡於耳、故胸脇痛而耳聾。...九日少陽病衰、耳聾微聞。」(甲 13)
- 素 8. 熱論 09-03a07 「兩感於寒者、...三日則少陽與厥陰俱病、則耳聾囊縮而厥、水漿不入、不知人。」(甲 14)
- 素 9. 刺熱篇 09-07b08 ~ 09 「熱病先身重骨痛、耳聾好暝、刺足少陰。」(甲 15)
- 素 10. 厥論 12-13a04 ~ 05 「少陽之厥、則暴聾頰腫而熱、脇痛、(困)不可以運。」(甲 25)
- 素 11. 厥論 12-14a08 「手太陽厥逆、耳聾泣出、項不可以顧、腰不可以俛仰。」(甲 6)
- 素 12. 脈解篇 13-10a08 「太陽...所謂浮為聾者、皆在氣也。」
- 素 13. 刺禁論 14-04b06 「刺客主人內陷中脈、為內漏、為聾。」(甲 7)
- 素 14. 繆刺論 18-03b06 「邪客於手陽明之絡、令人耳聾、時不聞音、刺手大指次指爪甲上去端如韭葉各一疔、立聞、不已、刺中指爪甲上與肉交者立聞、其不時聞者、不可刺也。」(甲 8)
- 素 15. 繆刺論 18-06a05 ~ 06 「耳聾、刺手陽明、不已、刺其通脈出耳前者。」(甲 9)

*除外(運氣七篇)

氣交變大論 20-02b02 「歲火太過、炎暑流行、金肺受邪。民病瘧、少氣(欬)喘、血溢血泄注下、(啞)躁耳聾、中熱肩背熱、上(心)熒惑星。」

六元正紀大論 21-08b01 「民病寒熱瘧泄、聾(暝)嘔吐」、21-08b07 「民病熱中、聾(暝)血溢」。

至真要大論 22-05a06 「歲太陰在泉、草乃早榮、濕淫所勝、則埃(昏)巖谷、黃反見黑、至陰之交。民病飲積心痛耳聾、渾(渾)焯焯」、22-17b03 「少陰司天、客勝則(暈)嘔頸項強、肩背(脊)熱、頭痛少氣、發熱耳聾目(暝)、22-17b07 「少陽司天、客勝則丹(疹)外發、及為丹(瘰)瘡瘍、嘔逆喉痺、頭痛(啞)腫、耳聾血溢」

『靈樞』(明刊無名氏刊本)

- 靈 1. 終始 04-07a09 ~ 10 (素 3、甲 4)
- 靈 2. 經脈 05-04b04 「小腸手太陽之脈、...所生病者、耳聾。」(甲 2)
- 靈 3. 經脈 05-06b07 「三焦手少陽脈、...是動則病耳聾、渾(渾)焯焯。」(甲 3)
- 靈 4. 經脈 05-10b05 「手陽明之別、名曰偏歷。去腕三寸、別入太陰、其別者、上循臂、乘肩(髃)、上曲頰偏齒、其別者、入耳、合于宗脈、實則(齶)聾、...」(甲 5)
- 靈 5. 寒熱病 09-02a09 ~ 10 「(足)手(本輸、'太素'作'手')少陽脈也、名曰天(癰)。...暴聾氣蒙、耳目不明、取天(癰)。」(甲 18)
- 靈 6. 熱病 09-06b06 「熱病先身重骨痛、耳聾而好暝、取之骨、以第四鍼。」(甲 16)
- 靈 7. 熱病 09-06b08 「熱病不知所痛、耳聾不能自收、口乾、陽熱甚、陰頗有寒者、熱在髓、死不可治。」(甲 17)
- 靈 8. 厥病 10-02a06 ~ 09 「耳聾無聞、取耳中。耳鳴、取耳前動脈。耳痛不可刺者、耳中有膿、若有乾(疔)聾、耳無聞也。耳聾、取手小指次指爪甲上、與肉交者、先取手、後取足。耳鳴、取手中指爪甲上、左取右、右取左、先取手、後取足。」(甲 29)
- 靈 9. 雜病 10-03b06 ~ 07 「聾而不痛者、取(足)少陽。聾而痛者、取(足)陽明。」(甲 30)
- 靈 10. 決氣 11-03b01 「精脫者、耳聾。」(甲 1)
- 靈 11. 刺節真邪 21-06a01 ~ 08 「夫(癢)瞽者、耳無所聞、目無所見。...刺府輸去府病。...刺此者、必於日中、刺其聽宮、中其眸子、聲聞於耳、此其輸也。...刺邪、以手堅按其兩鼻竅、而疾偃其聲、必於於鍼也。」(甲 28)

『甲乙經』(醫統本)

- 甲 1. 卷一·陰陽清濁精氣津液血脈第十二 01-20b07 「精脫者、耳聾。...腦髓消、(疔)瘰耳數鳴。」(靈 10)
- 甲 2. 卷二·十二經脈絡脈支別第一上 02-03b10 ~ 11 「小腸手太陽之脈起于小指之端...是主液所生病者耳聾目黃頰腫頰頰肩臑肘臂外後廉痛」(靈 2)
- 甲 3. 02-05a12 ~ 05b01 「三焦手少陽之脈起于小指次指之端...是動則病耳聾渾(渾)焯焯(啞)腫喉痺」(靈 3)
- 甲 4. 02-07b09 ~ 10 「少陽脈絕其終也耳聾百節盡縱目(素)系絕系絕一日半死其死也目白乃死」(素 3、靈 1)
- 甲 5. 十二經脈絡脈支別第一下 02-10b04 ~ 06 「手陽明之別名曰偏歷去腕三寸別走太陰其別者上循臂乘肩(髃)上曲頰偏齒其別者入耳會於宗脈實則(齶)齒耳聾虛則齒寒痺(高)取之所別」(靈 4)

- 甲 6. 卷四・經脈第一中 04-07b08 ~ 09 「手太陽厥逆耳聾泣出項不可以顧腰不可以俛仰治主病者」(素 11)
- 甲 7. 卷五・鍼灸禁忌第一上 05-04b02 ~ 03 「刺客主人內陷中脈為漏為聾」(素 13)
- 甲 8. 卷五・繆刺第三 05-13a08 ~ 11 「邪客於手陽明之絡令人耳聾時不聞音刺手大指次指爪甲上端如蕤葉各一痛立聞不已刺中指爪甲上與肉交者立聞其不時間者不可刺也耳中生風者亦刺之如此數右取左左取右」(素 14)
- 甲 9. 05-14a11 ~ 12 「耳聾刺手陽明不已刺其過脈出耳前者」(素 15)
- 甲 10. 卷六・五味所宜藏生病大論第九 06-19a07 ~ 09 「肝病者兩脇下痛引少腹令人善怒虛則目視視無所見耳無所聞善恐如人將捕之取其經厥陰與少陽血者氣逆則頭痛耳聾不聰頰腫取血者」(素 4)
- 甲 11. 06-19a10 ~ 11 「徇蒙招尤目瞑耳聾下實上虛過在足少陽厥陰甚則入肝」(素 2)
- 甲 12. 06-19b09 ~ 11 「肺病者喘逆欬氣肩背痛汗出尻陰股膝髀腓足皆痛虛則少氣不能報息耳聾喉嚨乾取其經手太陰足太陽外厥陰內少陰血者」(素 5)
- 甲 13. 卷七・六經受病發傷寒熱病第一上 07-01a10 ~ 11、01b06 「傷寒...三日少陽受之少陽主骨其脈循脇絡於耳故胸脇痛而耳聾。...九日少陽病衰耳聾微聞」(素 7)
- 甲 14. 07-02a05 ~ 06 「其兩感於寒者...三日少陽與厥陰俱病則耳聾囊縮而厥水漿不入不知人者」(素 8)
- 甲 15. 07-03a12 ~ 03b01 「熱病先身重骨痛耳聾好瞑刺足少陰病甚者為五十九刺」(素 9)
- 甲 16. 卷七・六經受病發傷寒熱病第一中 07-07b07 ~ 09 「熱病身重骨痛耳聾好瞑取之骨以第四鍼五十九刺骨病不食齧齒耳青赤索骨於腎不得索之於土土者脾也」(素 6)
- 甲 17. 07-07b09 ~ 11 「熱病不知所痛耳聾不能自收口乾陽熱甚陰頗有寒者熱在髓也死不治」(素 7)
- 甲 18. 07-10b06 ~ 08 「肩背痛寒熱瘰癧遶頸有大氣暴聾氣蒙瞽耳目不開頭額痛淚出鼻衄不得息不知香臭風眩喉痺天痛主之」(素 5 に似る) 頸、手少陽
- 甲 19. 卷七・六經受病發傷寒熱病第一下 07-12a08 ~ 11 「振寒小指不用寒熱汗不出頭痛喉痺舌卷小指之間熱口中熱煩心心痛臂內廉及脇痛聾咳瘰癧口乾頭痛不可顧少沢主之」 手、手太陽、井
- 甲 20. 07-12a11 ~ 12b02 「振寒寒熱肩膈肘臂痛頭不可顧煩滿身熱惡寒目赤痛皆爛生翳膜暴痛衄衄發聾臂重痛肘攣痲疥胸中引臑泣出而驚頸項強身寒頭不可以顧後谿主之」 手、手太陽、俞
- 甲 21. 07-12b02 ~ 03 「熱病汗不出胸痛不得息頰腫寒熱耳鳴聾無所聞陽谷主之」 手、手太陽、經
- 甲 22. 07-13b08 ~ 10 「手足清煩熱汗不出手肢軫筋頭痛如錐刺之循熱不可以動動益煩心喉痺舌卷乾臂內廉不可及頭耳聾鳴窻陰皆主之」 足、足少陽、井
- 甲 23. 07-13b10 ~ 12 「膝外廉痛熱病汗不出目外皆赤痛頭眩兩頰痛寒逆泣出耳鳴聾多汗目癢胸中痛不可反側痛無常處俠谿主之」 足、足少陽、榮
- 甲 24. 07-14a08 ~ 09 「暴病頭痛身熱痛肌肉動耳聾惡風目皆爛赤項不可以顧脾極痛泄腸澼末骨主之」 足、足太陽、俞
- 甲 25. 卷七・陰衰發熱厥陽衰發寒厥第三 07-16b05 ~ 06 「少陽之厥則暴聾頰腫而熱脇痛固不可以運」(素 10)
- 甲 26. 卷十一・陽厥大驚發狂癲第二 11-03b12 ~ 04a01 「癲疾多言耳鳴口僻頰腫實則聾齶喉痺不能言齒痛鼻衄衄虛則痺高俞偏歷主之」 膈俞、背。偏歷、手、手陽明、絡
- 甲 27. 卷十二・手太陽少陽脈動發耳病第五 12-09a05 ~ 06 「暴厥而聾耳偏塞閉不通內氣暴薄也」(素 6)
- 甲 28. 12-09a08 ~ 11 「刺節言發蒙者刺府俞以去府病何俞使然岐伯對曰刺此者必於白日中刺其耳聽(一作聽宮)中其眸子聲聞於外此其俞也」(素 11)
- 甲 29. 12-09b01 ~ 02 「耳聾取手小指爪甲上與肉交者先取手後取足」(素 8)
- 甲 30. 12-09b03 ~ 04 「聾而不痛取足少陽聾而痛取手陽明」(素 9)
- 甲 31. 12-09b05 ~ 06 「耳痛聾鳴上關主之刺不可深」 耳前、手少陽足陽明、別名、客主人
- 甲 32. 12-09b06 ~ 07 「耳聾鳴下關及陽谿關衝掖門陽谷主之」 下關、耳前、足陽明少陽。陽谿、手、手陽明、經。關衝、手、手少陽、井。掖門、手、手少陽、榮。陽谷、手、手太陽、經
- 甲 33. 12-09b07 「耳聾鳴頭額痛耳門主之」 耳前、?
- 甲 34. 12-09b08 ~ 09 「聾耳中癩澁癩澁者若風聽會主之」 耳前、手少陽、繆刺論注云手陽明
- 甲 35. 12-09b09 ~ 10 「耳聾填填如無聞憤憤嘈嘈若蟬鳴頰頰鳴聽宮主之下頰取之譬如破聲刺此」 耳前、手足少陽、手太陽
- 甲 36. 12-09b11 「聾翳風及會宗下空主之」 翳風、耳前、手足少陽。會宗、手少陽、郄
- 甲 37. 12-09b11 ~ 12 「耳聾無聞天空(明鈔本「空」作「窓」、宜從)主之」 天窗、頸、手太陽
- 甲 38. 12-09b12 「耳聾嘈嘈無所聞天容主之」 頸、手少陽(本輪作「足少陽」、現在は手陽明)
- 甲 39. 12-09b12 ~ 10a01 「耳鳴無聞肩真(明鈔本「真」作「貞」、宜從)及腕骨主之」 肩貞、肩、手太陽、腕骨、手、手太陽、原
- 甲 40. 12-10a01 ~ 02 「耳中生風耳鳴耳聾時不聞」 陽(明鈔本「」作「商」、宜從)主之」 商陽、手、手陽明、井
- 甲 41. 12-10a02 「聾耳中不通合谷主之」 手、手陽明、原
- 甲 42. 12-10a02 ~ 03 「耳聾兩顛顛痛中者(明鈔本「者」作「渚」、宜從)主之」 中渚、手、手少陽、俞
- 甲 43. 21 12-10a03 「耳焯焯渾渾無所聞外關(明鈔本「關」作「闕」字、宜從)主之」 外關、手、手少陽、絡
- 甲 44. 22 12-10a03 ~ 04 「卒氣聾四瀉主之」 手、手少陽